

---

領域名：精神保健看護

報告者：瓜崎 貴雄

---

教育及び実践の課題

精神疾患に対するスティグマが大きい社会であると、精神疾患患者は自尊心を傷つけられる体験からセルフスティグマを強める可能性が高まる。セルフスティグマは希望を抱きづらくさせ、回復を滞らせる。本学の精神保健看護領域は「対象理解」を中心に据えて教育を展開しているが、「患者への関わり方が分からない」「怖い」といった学生の所感を目にする可能性がある。学生が精神疾患を正しく理解できるように、教育活動を改善していくことが課題である。

---

活用した論文の概要

Vrbova et al (2017) の目的は、統合失調症患者の生活の質、セルフスティグマ、性格特性、希望の関連を明らかにすることであり、チェコ共和国の精神科外来通院中の統合失調症患者 52 名を対象に調査を実施した。その結果、希望と生活の質には正の関連が、また、セルフスティグマと生活の質には負の関連があることが明らかとなった。統合失調症患者のセルフスティグマを減じることによって、希望を抱きやすくなり、生活の質が向上することが示唆された。

---

教育及び実践への活用

統合失調症患者のセルフスティグマを減じる上で、患者を支援する看護師自身の精神疾患に対するスティグマを減じることが重要である。看護基礎教育においては、学生が精神疾患を正しく理解し、スティグマを減じることができるような教育の展開が求められる。

2024～2025 年度の教育活動では、特に次の 3 点に取り組んだ。①講義のなかで、精神疾患の体験を有する人の語りを聴くことができる機会を設けた。②演習の自己学習テーマに「スティグマ」を加えた。③実習施設に就労継続支援 B 型や地域活動支援センターⅢ型の事業所と精神科デイケアを加え、精神疾患をもちながら地域で生活する人と接する機会を設けた。講義・演習・実習を履修した学生の所感では、「(不安障害は) 私たちもなり得るものだった」「(精神疾患患者にみられる思考の特徴を) 自分自身も持っている時があると感じた」「周囲の影響を受けて、ありのままの自分を出せないことは、精神疾患に限らず (私たちの) 日常でもあるように思った」等がみられた。これらの意見からは、学生が、統合失調症を含む精神疾患は誰にでも生じ得る病気であるとの認識を少しずつ持てるようになってきていることがうかがえる。

また、2024～2025 年度の研究活動では、セルフスティグマを減じる看護を実践する上での示唆を得るために、本稿の報告者が中心となり、精神保健看護領域の教員で「日本における統合失調症患者のセルフスティグマの関連要因についての文献検討」に取り組み、論文を執筆した。

---

参考文献

Vrbova K, Prasko M, Kamaradova D, et al. (2017) . Quality of life, self-stigma, and hope in schizophrenia spectrum disorders: a cross-sectional study. *Neuropsychiatric Disease and Treatment*, 13, 567-576.